Newsletter of International Student Center, Gifu University

# 留学生センターニュースレター…

第4号

3.15,2005

## 公開セミナー
## 「外国人との日本語でのコミュニケーション講座」を開催しました。

2004年12月に、留学生センターでは、岐阜大学活性化経費（教育）事業の一環として、公開セミナー「外国人との日本語でのコミュニケーション講座　～まっと日本語でしゃべろまい～」を開催しました。外国語でのコミュニケーションは、言語知識の限界があることから、さまざまな問題点に気づくことができるのですが、日頃不自由を感じない母語言語でのコミュニケーションではあまり注意をはらっていないのではないでしょうか。このセミナーでは、日本語を、外国人とのコミュニケーション手段と見た場合、どのようなことに気をつけたらいいかについて解説しました。扱ったトピックは、外国人が話す日本語の音声的な特徴や、日本語をどのように日本語で説明したらいいか、岐阜方言はどう扱えばいいのか、等でした。本学の学生および地域住民から、延べ49名の参加がありました。参加者からは、「外国人と話しているときに漠然と感じていた疑問について、きちんと理解できた」「日本語について説明するときの考え方がわかった」などのご意見をいただきました。また、予想外に外国人の参加も多く、「外国人が聞くことも前提に入れた内容にしてほしい」、「どのように外国語を学習すれば効果的かという話を聞きたい」などの要望もありました。参加者のご意見を基に、来年度も留学生センターでは「国際化」に関するセミナーを開きたいと考えています。

## 社会で活躍する修了生

### 日本で活躍している元岐阜大学留学生を紹介します。

**カイル・ヒル（元グリフィス大学からの交換留学生）**

言語を勉強する人は、その言語をよく習うには、その国に行く他にはありません。私が岐阜大学に留学したのは、1999年でした。一年位、留学生向けの全学共通授業と一般の授業をとって、日本語や日本の文化と歴史から、哲学、思想、心理学や音楽まで、親切な先生の指導のもとで色々と勉強しました。

日本語能力は向上しましたが、それだけではなく、岐大での勉強は私に、大学院に行って日本語の通訳と翻訳を勉強する自信を与えて、今の仕事への道の第一歩でした。したがって、東京で日本の大きな法律事務所で翻訳をしている私は、岐大と岐大の皆様に対してとても感謝しており、その第一歩はいつまでも忘れられません。

しかし、留学は、ただ単に勉強するためだけではありません。別の国の一人になって、その国の人たちの文化、習慣、考え方や生活のしかたを少しずつ身につけて、友達ができて知らないうちにその国が自分の国のように、英語で言うと２番めのhomeになります。

私の場合には特に印象強いのが、岐大のラグビーチームでした。先生方やマネージャーたちの皆さん、特にチームの皆さんが、私をとても親しく応援してくれました。色んなところに行って試合をして、チームの皆さんと一緒に頑張って、日本と日本人をいつもと違う立場から見ることができたのが、岐阜大学での留学のおかげで、私の人生の貴重な一部を占めます。だから、私が日本語を勉強していたグリフィス大学（Griffith University）と岐阜大が姉妹大学の関係があって本当によかったです。

この場をお借りして、岐阜大学の先生方や皆様、その貴重な経験をさせて下さって本当にありがとうございます。

いつまでも岐阜大学の友達でありたい、岐阜人のカイル・ヒル（Kyal Hill）より。

**アンナ・カーリン・エリクソン（元ルンド大学からの交換留学生）**

1999年６月岐阜大学に初めて来ました。サマースクール＋１年の留学の後国へ帰って、そして就職で2004年８月日本に戻ってきました。現在岐阜県庁の情報産業室で働いています。留学時代と今の仕事と一番つながっていることは日本語の能力に自信が持っているようになったことです。職場で外国語でいろんなことをする時に、言葉をよく知っているかどうかというよりも自分が自信を持つことの方が大切だと思います。岐阜大学の授業で本からだけではなくて、毎日の生活の中で実際に使われている日本語も勉強しました。例えば日本語で発表をすることとか、日本語でコンピューターのpower pointというプログラムを使うことなどでした。いくら漢字とか文法を勉強しても、実際に活用しなかったら、日本語が上手にならないと私は思っています。

**ヤツェク・メンディク（ワルシャワ大学）**

私は、ワルシャワ大学日本学科の学生のヤツェク・メンディク（Jacek Mendyk）です。2001年10月から2002年９月にかけて、日本語・日本文化研修プログラムの学生として、岐阜大学に留学しました。その年から、岐阜大学は初めて日研生を受け入れることになり、我々学生にとっても、先生方にとっても、ある意味で実験のようなものでした。文化・習慣の異なる８ヶ国から来た８人の留学生が円滑なコミュニケーションがとれるかどうか、些かの不安がなかったとは言えません。

大学２年生を終えたばかりの私にとって、初めての日本で、自らの日本語に自信がなく、授業についていけるかと気を揉んでいました。しかし、実際に参加してみたら、思ったほど難しくないということが分かりました。そして毎日、こつこつ勉強していきました。日研生として、日本語・日本文化など、様々な授業に参加させてもらいましたが、新しいことをたくさん知ることができ、とても印象深かったです。また、先生方やグループの仲間の皆さんにも仲良くしていただいたおかげで楽しい一年になり、いい勉強にもなりました。

しかし、大学での授業は、留学の一部に過ぎません。私のように外国のことを専門として勉強する者にとっては、その国に行ってみないと解らないことが山ほどあるわけです。日本に留学できたおかげで、その土地にいることだけで、テレビやラジオを通して、日本語と日本文化を全身で吸収し得たことが何よりも有難かったです。休みの時間を大いにいかし、それまで本やテレビでしか見たことのなかったところへ行くことが出来て、さすが百聞は一見に如かずとも言うように、どれもとても感動的でした。また、大学で知り合った学生といろいろ話をして、現代の日本人の心を、より深く理解し得たと思います。

留学生寮での生活も楽しかったです。世界中の国々から来た、自分とは全く違う環境で育った人々と接触して、ああ、こんな考え方もあるんだと、今更ながら考えさせられました。

妙なことに、日本にいる間、私の日本語能力がどれほど上達していたかは、全く判りませんでした。日本語のみの日常生活の中で当たり前だと思ったことに、帰国して初めて気が付きました。10月に、１年ぶりにワルシャワ大学の授業に参加してみると、日本語の理解に殆ど不自由はなく、話し方も大分自然かつ滑らかになり、文章作成も幾分楽になったことが分かり、とても嬉しかったです。おかげで、後輩たちにかなり尊敬されるようになり、それが今まで続いています。

今現在は、５年生で、ようやく修士論文を仕上げたところです。岐阜大学で小論文のテーマにした豊臣秀吉の書簡についての論文で、もしあの時に留学していなければ、このような論文も書かなかっただろうと思います。

将来は、やはり日本に関係のある会社に就職したいと思ってはいますが、具体的なことはまだ何も決めていません。通訳・翻訳だけでいいのか、それとも日本語を生かして例えば経済関係の仕事をするべきなのか、いろいろと考えているところです。しかし、その前に、今年の３月から半年間、愛知万博ポーランド館のスタッフとして日本に行く予定です。久しぶりの日本でとても楽しみです。自分に負わされた責任が大きいですけれども、一生に二度とないような冒険でもあり、きっと自己満足と充足感の得られる仕事だと思います。日本語を使って、母国の文化を紹介する、まるで夢が実現したような感じです。ポーランド代表の一員になれたのも、日本に留学したおかげで日本語能力が今のレベルに達していることの影響も大きいと思います。もしも、留学することが出来なければ、または留学で満足できなかったとしたら、今の私も存在していなかったのだろうと、しみじみと心の中で感じています。

## グリフィス大学交換留学制度

グリフィス大学　スーザン・アンダーソン

2004年12月15日留学生センターに訪問されたスーザン・アンダーソン先生（写真右）

グリフィス大学は学生総数２万9000名を擁し、オーストラリア、クィーンズランド州南東地域に５つのキャンパスを持つ国立大学です。当大学の国際交換留学制度は、数少ない海外の大学との間で1980年代初期に始まりました。しかし今日、グリフィスの学生は世界各地にある100ヶ所以上の大学に留学することができるようになりました。その中に日本の18の大学が含まれており、岐阜大学はその18校のうちの１校です。

グリフィス大学は「世界を知ろう。自分の可能性を知ろう」というスローガンを掲げ、学生に対して交換留学制度を積極的に呼びかけています。留学により、学習機会の増加や各個人の向上、異文化への理解が深まることが期待されます。また留学経験は、厳しい卒業後の就職市場においても有利になるでしょう。

交換留学制度への参加資格は、グリフィス大学で一年間の履修を終えていること、さらに、成績平均値（GPA）が５以上（最高７）であることです。それに加え、優れた対人能力を持ち、文化の相違に対する理解を深めようとする強い熱意を示すことが要求されます。交換留学生は受け入れ校で６ヶ月、または、12ヶ月を過ごし、グリフィス大学に戻った際、その間の学習に対して単位が認められます。

さらに、国際交換留学制度を促進するために設けられた制度により、成績平均値（GPA）が5.5以上の学生は、留学費用の補助として学長から奨励金を受ける資格があります。この奨励金は、航空運賃や生活費の一部を補助し、学生を奨励・援助するために設けられたもので、1997年以来、毎年授与されています。奨励金の額は、留学する国によって以下のように異なります。

| | | | |
|---|---|---|---|
| ●日本以外のアジアとアフリカ | $2000 | ●アメリカ | $3000 |
| ●日本 | $4000 | ●ヨーロッパ | $3000 |
| ●カナダ | $2500 | ●南アメリカ | $3000 |

グリフィス大学は意見交換、および、学生や教職員の交流の重要性を認識し、2002年に国際化委員会を設立しました。学生や教職員の交流に関し、長期に渡りご尽力頂いた岐阜大学に対して感謝の意を表します。

## 「日本人学生との会話クラス」

太田　孝子

「口頭表現1E」は、日本人学生と共に日本語の会話を行う初級Aクラスの授業である。センター開設以来、留学生と接する中で痛感してきたことは、特に渡日間もない留学生と日本人学生の交流がほとんどないということであった。このクラスはそのような問題を解決するための一方策として開講されているクラスであり、「日本語サロン」という自主的な集まりの時代（1997年4月～）、教育学部の「国際理解講義・実習」の科目としても兼担した時代（98年10月～2004年3月）など、幾つかの変遷を経て今日のクラスに至っている。

今期参加してくれた日本人学生は8名（内、ほとんど毎回出席してくれた学生は3名）であり、ハンドアウトを受け取り、その日の授業の目標・進め方などの説明を受けてから、８名の留学生とペア／グループを作り、その日のトピックに従って、ハンドアウトの読み、語彙や意味の確認、有用表現の練習、相互の会話、最終発表などの順で教室活動を行った。

トピックは「買い物」「注文する」「乗る」「病院で」「部屋を探す」など、日常生活に役立つ内容を考慮しており、留学生が自然な日本語に触れ、各自のレベルで話せるようになることを目的としている。参加する日本人学生にとっても、留学生の国の文化・国情などを知る機会となるばかりでなく、留学生が理解できる日本語で説明することの難しさや、自国日本の文化や習慣・歴史を知らないことに気づく機会としても作用している。

留学生と日本人学生によるこのクラスは、学内の小さな活動ではあるが、双方に刺激を与えあうクラスとして、今後、日本人学生の参加が増えることを願っている。

**【参加している日本人学生のコメント】**

- 今回初めて、留学生とマンツーマンで大学を案内して、コミュニケーションの難しさを改めて感じました。言葉だけでなく、非言語的なコミュニケーションの大切さを感じました。（10月14日）
- 「～て」の言い方を習ったばかりのようで、私がその表現を使ったとき覚えようと努力していました。（11月18日）
- 日常で覚えると便利だと思ったのですが、「無理」という言葉の説明がうまくできませんでした。（12月9日）
- しばらく会わなかったのですが、すごく日本語がうまくなっていて、びっくりしました。（1月13日）

## 研究者紹介

今回は、留学生センター、森田晃一教授の研究テーマを紹介します。

今年も、初春のある麗らかな一日、茶道江戸千家宗家で催された初釜に行ってきた。久々に出会う人々交わす新年の挨拶。この初釜に限らず、茶会に行くと、多くの人々との心和む出会いが待っている。工夫の凝らされた空間を共有しながら、相集った人々がともに楽しい清閑の時を過ごす。これは、茶道という総合的な芸術に含まれている重要なファクターの一つである。

私の専門は日本文化史だが、現在はとくに茶道史に深い関心をもち、総合芸術である茶道を通して日本文化の特質を見ることをテーマとしている。千利休によって大成された茶道は、趣味的な風雅を味わい、精神的な高みを求める、という本来の在り方のみでなく、政治と密接に関わって茶会ではさまざまな情報を収集する手段ともなっていた。その意味で、とくに武家が学ぶべき「教養」の一つだったとされている。

今執筆中の論文は、近世都市・江戸に千家の茶をもたらし、諸階層を門人に持った江戸千家流祖・川上不白に焦点を絞って、不白という一人の茶人を中心にどのような文化社会が形成されたのか、18世紀後半という時代の中で江戸という都市の特殊性が不白の茶の湯の発展にどのような影響を与えたのか、ということを追究したものである（今年刊行する『江戸町人の研究　第６巻』吉川弘文館に収載予定）

## 留学事前研修（英語集中コース）

太田　孝子

留学を希望する日本人学生に対する事前研修の一つとして、英語の集中コースを以下の日程・内容で実施した。

日　　程：平成16年12月20日～21日（各４時間）、27日～28日（各８時間）、及び平成17年1月12日～2月23日までの毎週水曜日各２時間。

内　　容：TOEFLの聴解問題・解説及び問題の実演、ドラマ（NHKドラマ「フレンズ」を使用）のディクテーションと実演、トピック会話（「なぜ留学したいのか」「家族について」「好きなスポーツ」「ホームステイ先で」「岐阜について」などのトピックに従って、２～３人がグループになり順番にチューターなどの席を回りながら、１人が５～15分会話・質疑応答）、ディベート（「犬が好きか猫が好きか」など２グループに分かれて討論）、プレゼンテーション（３～４名でグループを作り、留学生・日本人留学体験者に各大学について質問し、その結果を発表し質疑応答）などを行った。

チューター：長屋久将（地域科学部、ノーザンケンタッキー大学に留学）、広瀬千春（教育学部、グリフィス大学に留学）、ヨーナス・リンドボリ（ルンド大学からの交換留学生）、メリッサ・チャンパコ（サンディエゴ大学からの交換留学生）

参加登録学生数：33名

## ３月３日に第17期日本語研修コース修了式が行われました。今期は23名が無事修了しました。